

人権なら

2020年7月1日

第115号

NPOなら人権情報センター

●ひと・まち・生き生き

第20期通常総会を開催

2020年度事業計画などを協議し決定

NPOなら人権情報センターは6月14日、田原本町内で第20期通常総会を開催した＝写真。各支局の会員らが出席。事業計画などを協議決定した。



司会の明見美代子理事が総会の成立を宣言。コロナ感染予防のため、「書面表決」の総会も考えたが、「緊急事態宣言」解除を受け、通常通り開催することになったと説明した。

古川友則理事長があいさつ＝写真。全世界を覆うコロナウイルスで社会経済活動が停滞。格差が一層拡大している。米国での白人警官による黒人男性殺害に対する抗議行動は、世界各地に波及。時代は大きく動いている。私たちも差別と人権の課題をより深く追求していくことにしたい、と語った。

法人なら人権 第20期総会



議案として、2019年度事業報告、同収支報告、同監査報告、2020年度事業計画、同予算が提案された。とくに、事業計画では、古川理事長が、私たちはどんな時代を生きているのか。世界—日本を覆いつくす新型コロナの感染状況や、一層深まる格差拡大の中にあって、ベーシックインカム(基本所得保障)に注目したい。当法人に求められている諸課題の克服に向けて、一層の協力を会員に呼びかけた。

質疑では、河合支局の池原真智子さんが新型コロナ特別定額給付金(10万円給付)の支給に際して、お金が世帯主に振り込まれ、DVや児童虐待で避難

している当事者が受け取るには避難証明が必要となる。相談が支局などにあれば、対応してほしいと要望。古川理事長は敏感に対応すると回答した。

総会は役員選任など、すべての議案を採択した。

「性的マイリティと人権」を学習

「性と生を考える会」の中田ひとみさんを招いて

総会后、コロナで延期していた第2回学習会を開催。性と生を考える会の中田ひとみさんが「性的マイリティと人権～ひといろいろ 性もいろいろ～」と題して話をした＝写真。



中田さんは、性的マイリティの方々とはどんな人たちなのか。どんなことで悩んでいるのか、について考えたい。性的マイリティとは多数の人とは異なる性のありようを持つ人のことで、「LGBTQXA」と大別されるとして、その一つ一つのアルファベットの内容(例:Lはレズビアンのこと)を説明した。

性的マイリティの人々はいじめ被害や不登校、自殺念慮などの経験が多い。しんどい目に遭っても他人に言えない。親へのカミングアウトも2割、職場では3割にとどまる。モデルとなる大人が近くにおらず、自分が変だと思って育つ。困りごとをどこに相談すればいいのか、わからない。自分らしく生きることが難しい。

私たちにとって大事なことは、違う人がいるんだ、と知り、お互いを認め合うこと。すべての人が尊重される社会が広がり、人々がつながっていけば、と話した。

中田さんは、卑下する自分を肯定できるようになった言葉は水平社宣言だった。他人が自分と違うのは当たり前だとして付き合っていけば良い、とまとめた。

コロナと向き合いつつ活動

感染リスクと背中合わせの状況が続く

世界を震撼させている新型コロナウイルス。大規模感染で死者も急増している。緊急事態宣言の解除後も、不安と混乱は続いている。私たちの日常は奪われ、予断を許さない状況は今後も続く。



私たちにとって事態が一変したのは、安倍首相が2月27日に発した全国すべての小中学校と特別支援学校の臨時休校を決定して以降だ。地元の三宅小学校も休校となった。そのため、事業委託を受けている学童保育が子ども支援の最前線となった。社会福祉法人ひまわりは子ども・障害者・高齢者と多面的な支援を展開している。

施設の開所を維持するため、1日数回のアルコール消毒、スタッフや子どもの手洗いの徹底、部屋の定期的換気など、感染予防に有効な対策を強化。子どもたちが安心して通ってこられる環境を整えている。でも、常に感染リスクと背中合わせの状況は続く。

施設を「閉鎖」することで問題は解決しない

障害者支援事業所ひまわりの家も同様だ。「感染者は無症状の人を含めて隔離(入院)」「感染者または濃厚接触者が出た施設は閉鎖」という基準に則り、施設内で感染者・濃厚接触者が出た場合のシミュレーションを実施した。このことは、ひまわりメンバーの支援を現場で継続する覚悟を持つためだった。

とくに、グループホームは福祉事業所であると同時に、生活の場でもある。「閉鎖」することで問題は解決しない。濃厚接触者は「2週間の自宅待機」となっている。だが、グループホーム内に待機場所を確保することは容易ではない。様々な状況を想定した準備が必要となる。不測の事態に備えて支援に必要な物資を

揃えた。足りないものはメンバーと一緒に自作することにした。とくに、医療現場でも不足している「医療用ガウン(防護服)」と、「フェイスシールド」を制作した。

感染者や濃厚接触者への支援が必要になった場合、最も重要な問題は人員体制の確保である。

千葉県にある「障害者支援施設北総育成園」では、施設内の集団感染が発生した時、支援対策本部を設置。県、施設設置者である船橋市及び関係医療機関が感染拡大の防止や利用者の健康管理・生活・介護などの支援を行った。感染した職員は入院し、当事者も重症者は病院に送られた。だが、他の利用者は施設に留められ、「施設の病院棟化」が進められた。

最善の準備をして有事に備えた態勢づくり

私たちもこれを教訓として備えておく必要がある。直ちにスタッフに個別面談。全員に話を聞いた。支援者も一人ひとり、生活や事情が異なる。基礎疾患の有無の把握も重要だ。聞き取りのポイントは「自分の事情を鑑みた上で、どういう形であれば支援協力が可能なのか。直接支援が難しい場合も含め、それぞれが置かれている立場と意思を確認しておくこと」にある。

それは、支援の最前線に立つ者だけではなく、後方支援で関わるスタッフも重要な役割を担うからだ。それぞれができることを自主的に想像することが求められる。「一人ひとりの意思確認」は大切だ。最善の準備をして有事に備えることは、東日本大震災への災害支援の経験からも学び、培われたものでもある。

「人との適切な距離をとること」が難しい人も

障害当事者の日常は一変した。収束が見えない不安の中、「コロナはいつ終わるの? コロナ嫌いや!」という声が日々絶えない。当事者の精神的ストレスや負担は増加した。楽しみにしている週末の外出も制限された。「今は我慢の時期やから」と声を掛けるのが精一杯。不安を少しでも軽減し、日常に近い可能な限りの支援を維持し、健康管理と精神的安定を確保するよう努めた。

(3面につづく)

コロナ後の社会にも課題が見える。「3密」を防ぎ、「ソーシャルディスタンス」を保った社会を目指そうとする取り組みも



その一つ。自閉症などの障害者には、「人との適切な

距離をとること」が難しい人たちがいる。その人たちにとって、「ソーシャルディスタンス」「新しい生活様式」の概念は、簡単に受け入れられるものではない。

そもそも私たちは「人と人の適切な距離が1.5メートルから2メートル」などという教育を受けたことがない。非言語コミュニケーションの一つであるボディタッチ(握手やハイタッチ)も、「人と人とをつなぐ大切なコミュニケーション」である。話がしたくて、したくて、相手に迫りながら会話をする人もいる。

「適切な距離」は千差万別で価値観が問われる

これとは反対に、他者との身体接触を過剰に拒絶する人もいる。適切な距離というのは千差万別である。新型コロナウイルスの出現は、その独自の文化や社会性をも脅かす。

ここは思考を止めず、コロナ後の社会のあり方を考え、障害者などに新たに課せられた問題を想像することが重要だ。マスクの着用ができない人、うがいができない人もいる。それが現実。ややもすると、「新しい生活様式」なるものを受け入れられず、その暮らし方ができない人たちは、またまた社会から排除・隔離され、新たな差別が生まれるとも限らない。

人の生きづらさを理解するには、他者や社会の価値観を押し付けず、お互いの歩み寄りが不可欠だ。コロナ禍で表面化した一人ひとりの価値観が改めて問われている。

「共生」と「排除」は常に表裏一体の関係に

私たちは「疫病(感染症)」を適切に恐れながらも、多様な人が存在する社会を生きていることを忘れては

ならない。障害者支援を仕事で片づけるのではなく、「共生」と「排除」が常に表裏一体であることを肝に銘じておく必要がある。

こんな危うい時代を生きることを背負った「今を生きる者の宿命」だろう。障害者が街に出るようになって40～50年。少し近づいたかに見えた社会との距離が再び遠のくことがないよう踏ん張りたい。

社会になんとか追従し、長いものに巻かれる感じがあるとすれば極めて危うい。ここは空気を読まず、社会の進み具合とは一線を画して考えること



も必要だ。自分の頭で考え、判断し、選択して歩まなければ、足をすくわれてしまうかもしれない。気が抜けない日々は続く。時にはコロナと「密」にならず、少し距離をおく「コロナディスタンス」の時間もあっていいのではないだろうか。人間と新型コロナウイルスとの生存競争はこれからも続いていく。

喜多学志(社会福祉法人ひまわり施設長)

やまゆい園事件4年で集会

「やまゆい園事件から4年—『新型コロナの中で地域の暮らしを考える』」をテーマにした集会が7月26日午後1時半から、奈良市中部公民館(近鉄奈良駅5分)である。主催は奈良県障害者差別をなくす条例推進委員会と相模原やまゆい園事件を考える会・奈良。

集会では、①やまゆい園事件における虐待についての検証委員会の中間報告②コロナ感染の重傷患者の人工呼吸器に関する「命の選別」反対③精神障害者が地域で暮らすための「アウトリーチ支援」についての報告と話し合いがある。

参加はコロナ対策のため、事前の申し込みが必要。申し込み・問い合わせはピープルファースト奈良(0745-42-1320)まで。

9月開催の研究集会は中止に

会場使用制限のため、実行委がやむなく判断

第12回奈良県「差別と人権」研究集会の第1回実行委員会が6月24日にあった。新型コロナウイルス



の感染広がりを受け、研究集会の9月開催について、どう判断するのか、を協議。結果、中止を決断した。

実行委は、これまでの研究集会開催に向けて進めてきた準備経過を確認するとともに、会場側から提示されているホール使用条件について協議した。

記念講演は最首悟・和光大学名誉教授に「コロナ渦にあつての『人間(いのち)と差別』」の演題で、また、パネルディスカッションでは、高橋年男さん、藤田敬一さんらにパネラーを承諾していただいていた。

しかし、会場の弥生の里ホールが使用条件として最大200人と人数制限。さらに、利用者は県内在住者に限る、としたため、集会の開催は困難、と判断。やむなく今回の研究集会は中止することにした。

実行委員からは、会場を変更して開催できないの

編集後記 ☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

白人警察官による黒人男性殺害への抗議行動は地元米国だけではなく、世界各地に波及した。人種差別による迫害や途方もない貧困格差の問題はコロナ禍でより顕在化。それも色んな形で噴出した。差別の根深さ、深刻さが改めて突き出た。今回、特徴的なのは奴隷制度下で暗躍し銅像まで建つ人物への批判が起きたことだ。未だ温存し続ける問題の根源に迫るこの動きは重要だ。日本が抱える沖縄基地問題や、韓国慰安婦、徴用工問題などの根源には少なくとも戦後処理のあり方がある。これが今日の問題を規定。解決を困難化している。歴史を清算しない限り、真の解決はないのだ。

か、の意見も出た。だが、代替会場の確保は困難、と判断。今年の企画については、次回の研究集会に生かしていくことにすることで一致をみた。

「かいほう塾」が始まった!

「かいほう塾」が今年も始まった=写真。開講式と第1回学習は約1

ヵ月遅れで、6月25日に実施。開講式では、三宅町の吉田陽介・社会教育



課長と式下中学校の中本克広校長が激励あいさつ。

教室は換気や机の配置を工夫。受付で検温・アルコール消毒のコロナ感染対策を実施。学習では、生徒たちが持ってきた課題や宿題に取り組んだ。

本事業は中学生の学習支援と居場所づくりが目的。講師(ボランティアスタッフ)は、式下中学校の先生、家庭教師のトライ、NPO担当スタッフが担う。

今後の日程は7月2日(木)、9日(木)、16日(木)、30日(木)。8月20日(木)、27日(木)。時間は午後7時~8時30分。場所は三宅町中央公民館2階。

■源泉徴収税上半期納付相談会のお知らせ

奈良県中小企業者協会は6月29日から10日まで(土日を除く)、源泉徴収税上半期納付相談会を開く。従業員を雇用されている会員、給与源泉徴収義務者は参加ください。時間:午前9:30~午後17:00/場所:田原本事務所/問い合わせ:0744(33)3939。

ニュースレター「人権なら」

発行:NPO法人なら人権情報センター

〒636-0223

奈良県磯城郡田原本町鍵301-1

TEL:0744-33-8585/FAX:0744-32-8833

E-mail:info@nponara.or.jp

http://www.nponara.or.jp/